

# 幼児期における自然体験の環境教育的意義の一考察

— 秋田・森の保育園の事例から —

岡 本 理 子

## A Study of the Significance of Nature Experiences in Childhood for Environmental Education

キーワード： ライフスタイル、選択肢、世代間交流、自主的・自発的参加

### はじめに

環境問題に関して 1992 年の「地球サミット」における「環境と開発に関するリオ宣言」で「人類の基本的欲求を満たし、全人類の生活水準を向上させ、生態系の保護・管理すること」、「大量生産・大量消費・大量廃棄型社会からの転換」が人類共通の課題とされた。我が国でも中央教育審議会答申（1996）で、環境問題は「現代文明と生活様式の在り方に問を投げかけているもの」であり、その解決には「我が国の社会経済システムの在り方そのものや生活様式を〔中略〕環境への負荷が少ないものへと変革することが重要である」と述べられている。このように環境問題に対処するためには、持続可能な社会の実現に向けて、現在の社会経済構造やライフスタイルの見直しが不可欠であること<sup>1</sup>は広く容認されていることである。

現代のライフスタイルは自然の影響をできるだけ排除するために努力していると言っても過言ではない。身近な例を挙げれば夏の暑さを冷房で、雨降りの時の道路の泥濘をアスファルト舗装で、など。しかしこのようなライフスタイルのなかで生まれ育った子どもたちは、自分の日常生活が自然から切り離されたものであるということに気づく機会が少ない。それゆえなぜ現行のライフスタイルの見直しが必要であるのかを理解するのは難しい。同時に現行のライフスタイル以外の選択肢をもたないということである。自然を知らなければ自然でない状態、すなわち不自然を認識することはできない。そのため自然体験学習は環境教育の基礎といえる。

また、どのような生活様式のもとに日々を送るかは、その人の価値観そのものの表れである。その生活様式の基盤となる価値観を形成するためには、子どもたちの選択肢を増やすことが重要となる。ライフスタイルに関する選択肢がないということは、持続可能な社会の構築に向けてどの方向に転換するのかという将来のビジョンが描きにくいということだ。選択肢を増やすには世代間交流によってさまざまな生活様式や価値観を知ることが重要であると考えられる。

環境教育に関しては、「国連環境計画」とユネスコとの共同援助で 1975 年に開かれた「国際環境教育ワークショップ」において「ベオグラード憲章」が採択された。そのなかで環境教育は実践活動や直接体験が重要であることが強調された。わが国においては環境教育の目標は、環境に対する豊かな感受性や見識を持つ人づくりと、よりよい環境の創造活動に自主的に参加し、環境への責任ある行動がとれる態度の育成とされ<sup>2</sup>、幼稚園教育要領でも、1956 年度までは「自然」という題目名であったものが、「環境」に変わった<sup>3</sup>。また 1998 年に改訂された学習指導要領で「総合的な学習の時間」が導入され、その課題例として国際理解、情報、環境、福祉・健康が挙げられた。そのなかで学習活動を行うに当たっての配慮事項として「体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること」と述べられている。それをうけて幼稚園や学校では環境教育の重要性に対する認識の深まりとともに自然体験学習を取り入れるようになった。しかし、自然体験学習には専門的な知識が必要なことや教師の時間的制約などの問題から、NPO 法人など様々な主体が自然体験や社会体験などのプログラムを提供するようになる。学校側もそのようなプログラムを活用するようになってきたが、そのような過程のなかで、自然体験学習の問題点として中央環境審議会答申（1999 年）や 2004 年に内閣府から出された「環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する基本的な方針」においては、自然体験活動が自己目的化される恐れが指摘されている。

そこで本論文では多数の自然体験学習のなかから、自然体験の自己目的化という陥穽に陥らないための示唆を多く含むと筆者が考える取り組みを紹介し、幼児期における自然体験学習のもつ意義と自主的・主体的行動について考察する。

## 1 「森の保育園」

秋田市の中心より国道 7 号線を南に 15km、日本海から内陸へ 4km 入った小さな都市近郊型の里山。佐藤清太郎が主宰する「森の保育園」はその里山にある佐藤が所有する森で行われている。佐藤はその地で代々林業を営んでいた家の 26 代目に当たる林業家である。所有する 120ha の杉林のうち、コナラを中心とした広葉樹と秋田スギが混じりあった 30ha の森。その森を佐藤は「健康の森」と名付け、20 年前から「森林と健康」を基本テーマに会員に開放している。佐藤は人間の作った森、人工林と、自然に生えている森との共合を目ざし「3 本巣植え・環境順応造林法」<sup>4</sup>を取り入れ、これまでの木材生産一辺倒の林業から「健康な森づくり」を試み、現在に至っている。「森の保育園」で子どもたちは、森に遊び、森に学びながら、心や体の健康、そして森の健康について考え、森とのふれあいを深めていく。

「森の保育園」には近隣の 15 保育園が利用し、年間延べ約 2000 人の子ども達が訪れる。親が車で家から保育園までで送迎するというのがこの子たちの普段の生活スタイルである。一般的に地方では公共の交通手段が不便なため、保育園の送迎だけでなく、日常の

移動時には殆ど自家用車を使う。その結果、地方の人びとは都市に比べて自然に囲まれた生活のようだが、囲まれているだけで接点は少なく、都市型生活をしている。意識的に自然との触れ合いの機会を作らなくてはならない状態だ。

### 事例 1

佐藤は子ども達に森に来て森と友だちになって、森と話をしてほしいと考えている。森と話をするには、森が語りかけてくるものを解読するセンサーを持つことが必要で、そのためには何度も森に来て森を覚えることが重要となる。そこから「森から見た人間はどのように映っているのか」「人間の健康と森の健康は連関しているのではないか」などが見えてくるという考えに基づき「森の保育園」を実施している。また森は晴れの日だけではないという考えから天候に関係なく雨が降っても、雪が降っても実施している。

環境教育を実施するのにあたって、それぞれの発達段階に留意する必要があることはいうまでもない。たとえば、抽象概念が未発達の幼児を対象とする場合、環境の知識を学ぶ以前に、その知識を理解するための能力をつける必要がある。安心して過ごせる森で楽しく遊びながら自然を体験し観察することでその能力を形成していく。「何度も森に来て森を覚える」と今度は周りのものに興味を示す余裕ができ森を観察するようになる。

佐藤の「森の保育園」と同じような活動「森のムッレ教室」<sup>5</sup>をスウェーデンでは50年ほど前から行っている。国際NGOナチュラル・ステップ・ジャパン<sup>6</sup>代表の高見幸子はスウェーデンで行われている「森のムッレ教室」では森での遊びを通じて、植物や動物のこと、さらにそれらが互いに関連しあいながら共生していることを学び、また活動を重ねていくことで自然のなかで楽しむ方法、そして自然に配慮することを同時に学ぶと述べている<sup>7</sup>。これは佐藤の「何度も森に来て森を覚えること」と同じである。また佐藤は「森は毎日同じ場所へ行っても決してそこは毎日同じではない。何度も森に来ることで自然の不思議さに気付くことができるのだ」という。

「森の保育園」は天候に関係なく実施されているが、晴天の日の森ではない、雨の日の森、雪の日の森も知ることによって自然は自分の思い通りにならないこともあるということを知る。スウェーデンで「森のムッレ教室」を実施しているシーブ・リンデは「スウェーデンには『悪いのは天気ではなく服装だ』という諺があり、しっかりしたレインコートを用意すれば子どもは雨の日でも雪の日でも森を楽しむことができる」と述べている<sup>8</sup>。

## 2 幼児期の自然体験

### 事例 2

佐藤は森に行く前に付き添いの大人（先生）に森の中では「子どもに命令語で語

り掛けないで」と注文する。また、人はそれぞれに歩幅が違うし、手をつなぐと両手を使えなくなり、かえって危ないので、森の中では手をつながないようにと注意する。

「森の保育園」の活動内容は、園児たちは午前 10 時に森の入り口近くの集会小屋に保育園の車で来て、小屋にお弁当を置き、森に入るために着替えをする。そこから森への道を、先頭と最後尾に園の保育師がつき、園児達は畦道を思い思いに歩く。森に入ると木の実を拾ったり、蛙を見つけたりして遊びながら中央広場まで行き、池の周りで遊ぶ。丸太の橋を渡る子、持っていた枯れ木の棒で池を突つつく子、草花に興味を持つ子など様々。池の深さは約 1m20cm。佐藤は暑い季節は子どもがよく池に落ちるといふ。しかし、落ちるからそばに寄るなども注意しない。「落ちたら救い上げればいい。面白いことに涼しくなると自然と子供たちは池から遠ざかるので落ちる子どもがいなくなる」と佐藤。

幼稚園教育要領<sup>9</sup>では「環境」の内容について「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」と述べられている。子どもにとって必要なのは、自分の行動を監視し命令する大人ではなく、自分と一緒に自然の大きさ、美しさ、不思議さなどを発見する大人である。

また「健康」の内容では体を動かす楽しさを味わいながら安全についての構えを身につけることに留意するようにとある。安全については時と場所によって対処が異なる。自分で考え、自分で行動する能力を身につけるには、いつも大人が「転ばぬ先の杖」を差し出すのではなく、自分で経験させることである。佐藤が「池に落ちてでも救い上げればいい」という理由である。もちろんそこには落ちてでも安全であるという保証がなくてははいけない。

### 事例 3

一頻り水の周りで遊ぶと今度はその先にある急な坂まで歩いていく。その坂を滑ったり転んだりしながら歩いて降り、急な坂を四つんばいになりながら登ってくる。冬は雪に覆われて子供達はその坂を滑り降りる。先に上に辿りついた子どもが、途中でズルズルと滑り落ちそうな子を助けようとして手を差し伸べ、自分も一緒に滑り落ちそうになる。それを見ていた子がその子を助けようとして手を差し伸べる。

幼稚園教育要領<sup>10</sup>「人間関係」の「友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う」「友達と一緒に物事をやり遂げようとする気持ちをもつ」「友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ」などの内容が、森の中では自主的・自発的に行われている。グループで行動することで達成感を共有し、他者への思いやりが芽生える。坂の上り下りが苦手な子供も、森の中ではいくらかでも他の遊びを創造することができる。

#### 事例4

森からの帰り道も各自が思い思いに歩き、小屋まで戻って着替えてお弁当。先に小屋に帰っていた子どもたちは着替えも終わり、最後の人が着くまでお弁当は御預け状態だが、誰も文句を言わない。

小屋の周りで遊んで待っている。お昼が済むと山の湧き水で水遊びをしたり、山法師の実を拾って食べたりして、午後2ごろ園の車で帰って行く。

幼稚園教育要領<sup>11</sup>の「人間関係」では幼児の活動を、他の幼児とのかかわりを深め、他人の存在に気づき、相手を尊重する気持ちを持って行動できるようにすることと述べられている。森の中や森の周りで遊ぶ材料は豊富にある。各自が自分にあった遊びを見つけることができるので待つことは苦痛でなく、また自分の気がつかなかった遊びを他者から学ぶことで相手を尊重するようになる。

### 3 体験学習の意義

#### 事例5

森で遊んだ後、集会小屋への帰り道、保育園児 A と保育士 K と筆者の会話

K：この園では毎月一度この森を訪れます。佐藤さんが危険がないと判断されたらその日が雨でも雪でもです。今まで中止したのは秋田で大雪が降ったとき一回だけです。勿論その日の状況で「今日は風がないのでここから先は蜂がいるかもしれないから行かないように」などの制限をつけることはあります。冬はこの辺り（森への畦道）は雪が積もって恰好の遊び場になります。

A：私、雪の時にここへ来るのはキライ！

筆者：どうしてキライなの？

A：だって、手とか足とかが、スッゴークつめたくなるんだもん。

佐藤は「冬は森から帰ってきてこの小屋でラーメンを作って食べさせてやると子どもたちはものすごく喜ぶんですよ。寒かった分おいしく感じるのでしょうね」と言う。大人には「冬でも家の中ばかりでなく、表に出て元気に遊んでほしい」という願いがある。

A は森での体験の中で、「冬、外は寒いけれど家の中にいると暖かい」「冬の森は寒くてキライ」「雪の森で遊ぶと寒くて手足が冷たくなるからイヤダ」「冬の森で遊んだ後の温かいラーメンを食べる時は嬉しい」等を感じている。周りの大人や教師には「寒い思いをしたその分だけよけいに温かい物がおいしい」と言うことを伝えたい、「冬の寒さも体験してほしい」などの思いがある。子どもは体験から何を、どのように学ぶのか。

西平直は「体験」について次のように言っている<sup>12</sup>。

体験現場にいるときは、実は、ただ詰め込んでいるだけ、咀嚼している時間があ



りません。次から次へと刺激を丸ごと飲み込んで、吸収する余裕がありません。ということは、体験しただけでは「食べた」ことにならないということです。口の中に詰め込みはした。でも、消化できず、吸収もしていない。それでは、自分を豊かにしたことにはなりません。

Aは森の中で楽しいこと、怖いこと、気味の悪いこと、寒いことなどを体験している。今は西平のいう口の中に詰め込んだ状態ということになるだろう。食べなれたラーメンがいつもよりおいしく感じるためには寒い体験をしなければならない。しかし、おいしいラーメンと寒い体験はまだAの中ではつながっていない。

佐伯胖は<sup>13</sup>、「わかる」ということを次のように説明する。

人は経験世界での実践を通して、実践として、すでに知っていることを、改めて「わかる」のであり、「なっとくする」のです。そしてそれが、新しい経験世界を開いてくれるのです。

Aの体験が、これからする体験や学習の積み重ねによって一つになる時、「寒い思いをした後の温かい食事はいつもよりおいしい」ことの意味を発見し、なぜ雪の時に外で遊んだ後のラーメンがおいしかったのか納得するのだ。

#### 4 自主的・自発的参加

事例5のように大人の思いと裏腹に、子どもの中には雪の中で遊ぶのが好きな子もいれば、Aのように「いやだなー」と思っている子もいる。冬に森にくる事はAにとっては、ある種の強制ということになる。では「いやだなー」と思っている子どもを大人の思惑で体験学習に参加させるということをもどのように考えたらよいのか。「自主的、自発的に行動する」ということは何か。教育は価値の押し付けとどこが違うのか。

佐伯は教育について次のように述べている<sup>14</sup>。

教育とは、子どもたちへ向けての私たち大人の「文化的実践への参加」のよびかけであると考えられるでしょう。あるいは、子どもたちはすでに、「子どもである」ということだけで、十分に文化的実践に参加しているのですが、より積極的に、大人からのよびかけの中で参加を深める活動を促すのが教育だと考えることができます。(傍点は原文)

また自発的に参加するということについて佐伯は次のように述べている<sup>15</sup>。

「わかる」ということは、結局は文化的実践に参加することなのです。参加する  
ということは、本物の価値を認め、うけ入れ、そして自発的に、価値の発見、創造、  
普及の活動に加わることです。(傍点は原文)

体験学習に参加させることは「文化的実践への参加の呼びかけ」である。参加を呼びかけ、  
一緒に体験しながら新たな価値の発見をしようとする活動は価値を押し付けることではな  
いといえる。

大人が森の中で子どもと一緒に発見し、感動することそれが「大人からの呼びかけ」で  
ある。

## 5 新たなライフスタイルの可能性

『環境教育指導資料』(1992)<sup>16</sup>では「豊かで便利な生活を追い求めて、我々は今日の生  
活様式を作りあげてきた。その便利さ、豊かさを当り前のように感じて、更に便利さや豊  
かさを享受しようとしている。しかし、こうした消費生活が〔中略〕都市・生活型公害や  
自然破壊を引き起こす原因となっている」と述べられている。また環境教育の基本的な考  
え方については、「次の世代を担う幼児児童生徒については、人間と環境のかかわりにつ  
いての関心と理解を深めるための自然体験と生活体験などの積み重ねが重要である。〔中  
略〕そして発達に伴って、子供の関心と生活体験を軸にして、問題解決のための課題や方  
法を見いだす能力を育て、環境の改善や保全、創造に主体的に働き掛ける態度や参加のた  
めの行動力を育てていくこと」が大切としている。

現代社会の大量生産・大量消費・大量廃棄が基本的ニーズをはるかに超えていることは  
ヴァンダナ・シバ<sup>17</sup>や見田宗介<sup>18</sup>などの論者の指摘するところである。では基本的ニーズ  
とそれを超えたニーズの線引きの基準を決めるのは誰なのか。それは私たち自身であり、  
その社会的合意に向けて私たち一人ひとりが参加することが重要である。なぜなら日常を  
どのように送るかというライフスタイルはその人の価値観そのものであるのだから。中原  
秀樹は『生活と情報』<sup>19</sup>で私たちがあらゆる社会問題の中で私たち自身が決定しなければ  
ならない社会的意思決定において、その判断基準は経験という情報によって蓄積された結  
果としての価値観だと述べている。Aが様々な体験をしながら学び、それでもAが「冬  
は暖かい部屋のなかで過ごすこと」を選んでも、「暖かい部屋で過ごす」ことは当たり前  
ではないと知った上で、そのことを選ぶのであれば、それはAが自発的に選び行動する  
ということである。さらに、当たり前と思っていたことが当たり前ではないのだという発  
見の上に新たな体験を積み重ねることによって、依然としてそこには新たな価値の発見の  
可能性が残されている。発見が人を変化させる。それが自然体験と生活体験の積み重ねの  
重要性である。

## おわりに

本稿では、持続可能な社会の構築に向けたライフスタイルの転換には、幼児期の自然体験によって形成された価値観が基盤になることを、秋田の「森の保育園」の事例から検証した。

人があるものに愛着を感じるのは、思い出がたくさんつまっているからである。もちろん高価であるとか、希少価値があるからという理由でもたいせつにしようという思いは生まれるが、愛着心は高価であるとか希少価値であるからという理由だけでは生まれない。そして愛着心があるからこそそれを守っていこうという思いがうまれるのである。マイケル・ボネットはジョージ・エリオットの『フロス河の水車場』<sup>20</sup>を援用しながら、「熟知や敬愛、充実感等は初見の知識ですぐにぱっと出てくるものではなく、それらは芽生え育っていくものであり、長年の間に積み重ねられた経験によって作り出される結果である」と述べている<sup>21</sup>。

環境問題の要因といわれている現代のライフスタイルにおいては、私たちは伝統的な価値観を古いものとして切り捨ててきた部分が多い。またグローバリズムの進展に伴い、地球上のどの地域でも均質なライフスタイルが取り入れられるようになってきている。佐藤が秋田で「森の保育園」をはじめたのは「自分が子どもの頃、祖父に連れられて森に来た。祖父は林業の仕事をしているので森の中では自分で工夫して遊んでいた。昔は遊びの中に暮らしがあった。自分が祖父と共にした体験を、今度は自分が子ども達にさせてあげたいと思ったから」と述べている。スウェーデンで「森のムッレ教室」を行っているシーブ・リンデも「昔は、自然が身近で父や大人と一緒に仕事を手伝いながら自然を大切にすることを学んできた」<sup>22</sup>と大人が自分の行動を通して次世代に価値観を伝承することの重要性を述べている。自分が受け継いできた伝統や価値観を日常生活を通して次世代に伝えていくことが、次世代を担う子どもたちが自分自身のライフスタイルを選びとるための選択肢となるはずである。そのためには、世代内だけではなく、世代間交流が重要である。

自然を知ることによって初めて、自然を保全することについて自分の意見をもつことができる。自分の意見を持って環境保全活動へ参加することが自主的・自発的参加といえるのである。子ども時代の体験が大人になってからのライフスタイルを選択する判断基準としての価値観の基盤となる。それ故、幼児期の自然体験は環境教育の基礎であり、ライフスタイルの転換に必要不可欠な基盤である自分自身の価値観を形成するものであると言える。

今後、本論を発展させるために、現在「森の保育園」において行われている保育士の研修<sup>23</sup>を観察し、「森の保育園」の実践を、いかにして普遍化していくか検討していきたいと考えている。



- 
- 1 環境省、中央環境審議会、1999、『これからの環境教育・環境学習―持続可能な社会を目指して―』。
- 2 文部省、1992、『環境教育指導資料』。
- 3 1956年度版までは教育内容が「健康」、「社会」、「自然」、「言語」、「音楽リズム」、「絵画制作」の6項目であったのが、1989年度版から「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5項目に変わり、「自然」という題目は「環境」に変更された。
- 4 自然力を生かした森林づくりで、省力化木材生産と自然環境とのバランスを考えた森林経営。秋田杉の苗3本を三角形（一辺約1.2m）にまとめて植える。3本の間に生えてきたクリ、ケヤキ、コナラ等の広葉樹はそのままにして針広混交の森づくり。3本の固まりは均等に植えるのではなく傾斜や土壌、間に生えてくる広葉樹に配慮しながら配置する。従来の一斉造林に比べて初期成長は旺盛ではないが、3本が支え合って力強く育つ。佐藤清太郎、1999、「スギ巢植え環境順応造林法及び広葉樹育成の実践と評価」『ハーモニストファンド 平成11年研究 活動報告』、TAKARA HARMONIST FUND。
- 5 2007年4月19日、日本野外生活推進協会主催の講演会「福祉・環境先進国スウェーデンに学ぶ野外教育～幼児から始める『森のムッレ教室』とは～」で配布された資料によると「森のムッレ教室」とは1892年にスウェーデンで発足した野外活動推進協会によって開発された5～6歳の幼児を対象とした環境教育プログラム。自然の中で五感を使った様々な体験を通して、子ども達はいきものとふれあい、ヒトも自然の一部であることを会得する。そして生態系や生物多様性の大切さをまなぶもの。スウェーデンでは200万人以上の子ども達がこのプログラムを体験している。
- 6 スウェーデンの小児癌の専門医カール・ヘンリク＝ロベール博士の提唱によって1989年に発足した環境教育団体の日本支部。日本支部は1999年に発足。
- 7 岡部翠編、2007、『幼児のための環境教育―スウェーデンからの贈り物「森のムッレ教室」―』、新評論。
- 8 前掲講演会での講演内容による。
- 9 文部省、1998、『幼稚園教育要領』、大蔵省印刷局。
- 10 同上。
- 11 同上。
- 12 西平直、2005、『人間教育学のために』、東京大学出版会、p.231。
- 13 佐伯胖、2002、『子どもと教育「わかる」ということの意味 [新版]』、岩波書店、p.188。
- 14 同上、p.200。
- 15 同上、p.212。
- 16 前掲書。
- 17 シヴァは工業先進国の豊かさは新たな人工的ニーズをつくり出し、それが財とサービスの生産増加を要求すると述べている。ヴァンダナ・シヴァ／熊崎実訳、1994、『生きる歓び―イデオロギーとしての近代科学批判』、築地書館。
- 18 見田は、現代は資本の成長にとって必要な需要をつくり出す方法を獲得したすなわち情報による消費の創出を常態とする時代であるとし、創出された消費を必要から離陸した消費の欲望とよんでいる。見田宗介、1996、『現代社会の理論』、岩波書店。
- 19 松岡明子編、1994、『生活と情報』、建帛社。
- 20 ジョージ・エリオットは「もし、この地上に子ども時代をすごさなかったなら [中略] われわれはかくもこの土地を愛することはできなかつたであろう。あらゆるものになじみがあり、なじみがあるからこそ愛しもある」と述べている。ジョージ・エリオット／工藤好美、淀川郁子訳、1994、『フロス河の水車場』『ジョージ・エリオット著作集 2』、文泉堂出版、p.28。
- 21 Bonnett,M.,2004,RETRIEVING NATURE Education for a Post-Humanist Age, Blackwell Publishing Ltd, Australia.
- 22 2007年4月19日、日本野外生活推進協会主催講演会「福祉・環境先進国スウェーデンに学ぶ野外教育～幼児から始める『森のムッレ教室』とは～」におけるシーブ・リンデの講演より。

- <sup>23</sup> 現在「森の保育園」では、4年前から秋田県民間保育所協議会の主催により、毎年1回研修が行われている。対象は保育士経験3～7年の保育士。